

ミステリ読書案内

2024. 1. 31 発行元

第548号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から4冊を紹介する。今回も全部常連作家によるシリーズものである。いつも書いているように、安心して手に取ることできて有難い。シリーズが更に続きますように…。

宝島社文庫に勢い

ミステリに関して言えば、今は宝島社文庫に勢いを感じる。たくさん出版社から文庫本が出ているが、ミステリの新人作家誕生の流れが宝島社中心に展開しているような気がする。『このミステリーがすごい!』大賞の果たしている役割りが大きくなったのだろう。

角川文庫がある程度まとまってミステリを出しているけれども、他の社は単発的になりつつある。単行本の方は平均的にバラけている感

覚。大きな賞の受賞作家が第一作、第二作…と書き続けているからだろうと思う。

ネットで「文庫本新刊」を調べるとミステリではない「ライト系」と思われる発行部数の少ない本が数多く並んでいる。私の住んでいる地方の市の書店にはほとんど入荷していないのではないかと…。(まあ、読みたいと思うような本ではないので…問題ありません。) これからの出版界、書店等のことを考えると、「現状は厳しいな」と感じるこの頃ではあります。

山本巧次『八丁堀のおゆう』

11月に宝島社文庫から出た本。シリーズ10作目に当たる。正しくは『大江戸科学捜査八丁堀のおゆう・抹茶の香る密室草庵』。今回の目玉になっているのは「密室殺人」。屋敷の配置図も登場して「本格もの」らしい作り。

駿河のお茶名主・徳左衛門が何事か訴えるために江戸にやってきたが、大川で水死体になって発見された。その捜査に取り掛かった「おゆう」は、茶問屋が集まった茶会で清水屋の旦那が殺された事件に遭遇。何人かが周りを見ている茶室の中で絞殺されたもの。誰も出入り出来ないように見えるのだが…。現代の科学の力も借りながら…。後半にはテレビでもお馴染みの有名人が登場してきて…。

今野敏『台北アセット』

11月に文藝春秋から出た本。『公安外事・倉島警部補』シリーズの7作目に当たる。『オール讀物』に連載されたもの。シリーズがスタートしたころの『曙光の街』『白夜街道』などはロシア絡みの面白さがあったが、ここ二十年くらいで世界情勢は大きく変わってしまい、公安外事の動きも違ったものになってきている。今回はネット上のサイバー攻撃に対するオペレーション。台湾にある日本企業の台湾法人がサイバー攻撃にあったとの情報が入る。たまたま台湾警察から「公安のあり方」についての公演の依頼を受けた倉島は、西本とともに台北に飛ぶ。倉島が該当の製薬会社を訪ねた後、その会社のシステム担当者が殺される事件が持ち上がる…。今野敏の作品にしては今ひとつ盛り上がり欠けるところが残念。

梓林太郎『横浜・彷徨の海殺人事件』

10月にトクマノベルスから出た本。『人情刑事・道原伝吉』シリーズの最新作。怪しい男が敷地内にいるとの連絡を受けた松本署の道原刑事は、その男を署に連れて帰った。かつて近くの老人ホームに勤めていたという滝谷と名乗る男は話が曖昧だった。調べてみて不明の点が多々あるけれども釈放することにした。その後、老人ホームで多額の金が盗まれた事件が浮かび上がり、道原は滝谷を追跡することに…。でも、本作は道原の捜査よりも、滝谷の過去から現在に至るまでの経歴・生活を描くことに中心があり、関係者とともに全国各地を動き回る逃げっぷりにかなりのページを割いている。

友井羊『スーフ屋しずくの謎解き朝ごはん 巡る季節のミネストローネ』

11月に宝島社文庫から出た本。シリーズ8作目に当たる。シリーズが進んでも、内容のレベルが下がることなく、日常の謎に取り組んでいるところが評価できる。四話収録の連作短編集の形式。四季に合わせた構成になっていて、最終話で明らかになってくる時間的な仕掛けも工夫されている。

第一話の『春待つ芽吹き』はスーフ屋しずくの接客を手伝っている慎哉の親戚が所有する北関東の山に山菜取りにみんなで出掛ける話。山菜を採り終えて、慎哉が小学生の時お世話になった老人の家を訪ねたところ老人は二ヶ月前に亡くなったことを聞かされた。その家に後片付けに来ていた孫娘に老人が隠していた「お宝」を探してほしいと頼まれる。皆で手分けして探すのだが何も見つけられなくて…。見えていても誰にも気付かれない「お宝」とは？ 第二話の『真夏の島の星空の下』は、理恵の従妹の友達の松任渚が沖縄旅行で体験した不思議な出来事の謎を解く話。と続いていく…。